

貧乏領主の娘は王都で
みんなを幸せにします

三園七詩

Nanashi Miscne



RB

レジーナ文庫

登場人物紹介



キャシー・アイリック

アイリック侯爵家の令嬢で、第二王子の婚約者候補。暴漢から助けてもらった事をきっかけにローズと知り合い、友人になる。従者であるロンに対しては、少し辛辣な一面も。

スチュアート

ロイとカイルの剣の師匠で、元執事。王都にいる間のローズの世話係を務めることに。執事として多くの人に尊敬されている。



ロイ・クロフォード

クロフォード王国の第二王子。幼馴染であるカイルの事をいつも気にかけている。大臣達の勧めで婚約者探しをするようになったが、乗り気ではない様子。

クレア

ロイの馴染みの元メイド。王都にいる間のローズの世話係を務めることに。メイドとしての腕前は一流で、ケーキ作りが得意。

バルト

カーバンクルという魔物。怪我しているところをローズに助けられる。

カイル・ローウェル

ローウェル公爵家の次男。第二王子ロイの幼馴染であり、側近も務める。過去のトラウマから女性が好きだが、ローズに対しては特別な気持ちを抱いているようで――？



ローズ・タウンゼント

タウンゼント男爵家の長女。食卓だけが持前の明るい性格を活かし、父と弟と仲良く暮らしている。ある日、一通の手紙をきっかけに王都へ向かうことになり――？

Characters

目次

貧乏領主の娘は王都でみんなを幸せにします

7

書き下ろし番外編

初恋

351

貧乏領主の娘は

王都でみんなを幸せにします

プロローグ

ここはクロフォード王国の隣国側に面した辺境地の国境沿いにある、とある領主が治める地。

乾いて痩せた土地が多く広がっていて、食物が育つのは領地の面積の半分にも満たなかった。

そのまた半分は深い森に覆われており、領地に住む民は農作と狩りをする。

そんな、暮らすには辛い土地でありながらも、この地を離れる領民は少なかった。

この土地を治めるのは、男爵のチャート・タウンゼント。タウンゼント男爵家は領民に愛されており、皆貧乏ながらも幸せな暮らしをしていた。

そんなタウンゼント家には二人の子供がいる。長女のローズと弟のクリスである。

母を幼い頃に亡くしたローズは、弟のクリスの世話をしながら屋敷やしきの家事もしていた。貧乏な屋敷やしきでは人を雇う事も難しかったのだ。

「お父さん、家事なら私が出来ますから、余分なお金は使わないで下さい」

「お父さん気にしないで。僕は姉さんという子にしています」

人を雇うお金があるなら領民の助けになるように使ってほしい……父の為にそう考えていた。

「なんていい子達なんだ」

しっかり者のローズに、物分かりのいいクリス。そんな可愛い我が子を溺愛する父。仲睦まじい家族、タウンゼント男爵家は助け合いながら領地を管理して暮らしていた。

そんな大変ながらも幸せな時間を過ごし、ローズが十五歳になった年。

王宮からきた一通の手紙により、事件はおきた。

一 王都へ、そして新たな出会い

その日も何気ない、いつも通りの朝を迎えていた。私は父と弟の朝ご飯を用意すると洗濯に向かう。

するとそこで、いつもの光景を見つけて眉をひそめた。

「ちよっとお父さん！ 下着は別にしておいてって言ったわよね！」

私は何度言っても洗濯物をいっしょくたにしてしまう父にムツとして大声で注意した。

「ローズ……年頃の娘がそんな事を大声で」

父は父で、女の子らしくないと心配そうに私の行動に頭を抱えていたが、大きなお世話である。

「この屋敷には私とお父さんとクリスしかないのよ！ 何を気にする事があるの？」

私はそんな事には構ってられないと洗濯を続ける。

「そうだな、私が不甲斐ないばかりに二人には苦勞をかける。やはり今からでも従者を雇おうか」

父がすまなそうな顔で私達を見つめている。

「お父さんは領民の為に税金をやりくりしているんだもの。私はそんなお父さんを誇りに思うわ。だから、お父さんとクリスの服を洗濯する事になんの抵抗もないの」

私は家族を心配させまいとドンツと胸を張る。

「姉さんは、洗濯だけじゃなくて料理も掃除も、家事を全部してくれてるじゃないか。

僕こそ何もしないで申し訳ないよ」

弟のクリスがシュンと肩を落としてしまう。落ち込むクリスに近づくとそつと肩を

触った。

「姉が弟の面倒を見るのなんて当たり前よ。それにクリスは私と違って頭がいいんだもの、タウンゼント家の長男として堂々としていてほしいわ」

私は優しく可愛いクリスを抱きしめた。そんな私達に父も近づいて、上からギュッと抱きしめてくる。

「お前達は本当に自慢の子供だよ」

私達はなんだかこそばゆくなり、顔を見合わせて笑った。

「僕、頑張って王都の要職に就けるように頑張るよ。そして父さんと姉さんを幸せにするんだ！」

「なんていい子なのかしら……私はその気持ちだけで嬉しいわ。クリスは自分が幸せになる事を考えてくれればいいからね」

そんな穏やかないつもと変わらない日を過ごしていたのに、その日王国から一通の手紙が届いたのだ。父はその内容を確認すると、顔を顰めて私に手紙を手渡した。私はその中身を読み上げる。

「この度、クロフォード王国の第二王子の婚約者を探す事となった。歳が近い未婚の娘はひと月の間に王都まで集まるように……って私には関係ないわね。歳は近いけど、

身分が足りないもの。それにしてもさすが王都、綺麗な紙ね。いいメモ帳に出来そうだわ」

紙を畳むとニヤリと見つめる。いい紙が手に入り、嬉しくなって顔が綻んだ。「いや、ローズ。お前の名前で届いているんだ。国からのお達しだから王都に行かないとならない」

「えー！ 婚約者だなんて、姉さんには早くないですか？」

クリスが不服そうな声を漏らした。

「そうもいかないんだ。王都からの書状を無視したとなったら、私だけならともかく、ローズにまで罰則があるかもしれないからな」

父はそう言って、自分の力ではどうする事も出来ないとするまなそうにしている。

「わかりました。なら、さっさと行つてとっとと帰ってくるわ！」

私は二人を安心させるように大丈夫だと笑って頷いた。

「いや……待つて姉さん、せっかく王都に行くんだから、少しはゆつくり王都を楽しんできなよ。屋敷の事は僕と父さんでどうにかするから！」

クリスがいい考えだと父の顔を見ながら提案する。

「そうだな！ 少ないが、いくらか持つていって好きな服でも買ってきなさい。ローズ

には私達の世話ばかりで苦労させているからな」

父もクリスの提案に賛成して、何やら本棚から封筒を取り出した。

「お父さんそれは？」

「これは何かあった時の為に貯めておいたお金だ。きっと今こそ使う時だな」

「いけないわ！ これはいざという時の為に取るときましよう。それに私は、欲しいものなんてないしね」

お金が入った封筒を父に返そうとすると、父は首を振って受け取らなかった。

「ローズ、親に遠慮なんてするな。まあ頼りない父親だが、たまには親らしい事をさせておくれ」

父は微笑むと私の髪を優しく撫でた。父の気持ちに私は鼻の頭がツーンとして、目に涙を溜めてしまった。

「ありがとうお父さん、クリス。このお金は大切に使うね」

お金が入った封筒をギュッと握りしめた。私は早速数少ない自分の荷物をまとめると、ちようど王都の方に向かうという商人の馬車に同乗させてもらう事になった。

「ローズちゃん王都でお婿さん探しか、寂しくなるねえ……」

領地の皆が話を聞きつけて、私を見送りに出てきてくれていた。

「おばさん、違うから。ただの観光よ！」

「でも王宮からの呼び出しなんだろう？ パーティーとかあるのかね？」

「わからないけど私には無理だわ。ドレスも何も持っていないもの。それにパーティーがあったとしても似合わないわ」

私は皆を笑わせようとカラカラと笑って答える。

そして、そっと自分の髪や手元を見つめた。髪は手入れはしているものの少し傷んでおり、手元は毎日の家事で荒れていた。こんな姿でパーティーなんて恥ずかしすぎる。

「じゃあ行くよ。ローズちゃん、準備はいいかい？」

商人のおじさんが声をかけてきたので、私はバツと気持ち切り替えて頷いた。

「じゃあ皆、行ってくるね。お父さんとクリスをよろしく！」

馬車から目一杯乗り出して皆が見えなくなるまで手を振った。領地の皆も馬車が見えなくなるまで見送ってくれていた。

ローズを乗せた馬車が見えなくなると町の皆は手を下ろす。

「ローズちゃんなら、着飾ればきっと綺麗なのにね」

「そうだな、若い頃のクラウディア様にそっくりだ」

町の人々はローズの亡くなった母親を思い出していた。



「でもローズちゃんだよ？ 大人しく出来ると思う？」

人々はいつも忙しそうに駆け回るローズを思い出して顔を見合わせる。

「奇跡でもおきなきや無理かもね」

そう笑って、ローズがいない寂しさを紛らわしていたのであった。



馬車を所々で乗り換えて数日、私はやっと王都にたどり着いた。

「やっと着いた……」

長時間の移動で痛くなったお尻を撫でながら、馬車に乗せてくれたおじさんにお別れを言う。

そして私は門を通過して、王都へと足を踏み入れた。

「えっと……まずはどこに向かえばいいんだっけ？」

私は右も左もわからない王都で立ち止まると、王宮からの封書を開いて見る。

「うーん、とりあえず王宮に行けばいいのかしら」

王宮に向かう事とだけ書いてあるので、私は高い建物が並ぶ王都の中心街へと向かう

事にした。

「なんて人が多いのかしら」

私は領地とは全然違う雰囲気物が物珍しくて、キョロキョロと周りを見ながら歩いていた。

ドンツッ！ すると誰かに正面からぶつかってしまった。

「す、すみません！」

自分の不注意だったのですぐさま頭を下げて謝罪した。

「いや」

ぶつかった相手は不機嫌そうにそれだけ言うとすぐに立ち去ろうとする。声を聞いて男の人だとわかると、私は顔をあげて相手の顔を睨んだ。

「ちよつと！」

確かに私の方からぶつかったかも知れないが、謝ったのにその反応はないんじゃないかと一言言わないと気が済まない。

相手の男の人は怪訝けげんそうな顔をして振り返る。その顔は整っており、領地ではお目にかかれなような端正たんせいな顔立ちだった。

しかし、私は構う事なく言いたい事を言う。見た目なんて関係ない。

「あなた、何か言う事はないの？」

キッと男の人を睨む。すると男の人はため息をついた。

「ああ、またか。悪いがおたくに構っている暇はない。手紙なら王宮の門番にでも届けてくれ」

男の人は面倒くさそうに答えて、また歩き出そうとする。

「手紙？ 抗議の手紙を書けて言うの？」

私は腕を組んで先程よりも大きな声で文句を言った。

「抗議？」

男の人はようやく足を止めて私の顔をじつくりと見る。ようやく目が合った。

「ええ、確かに私も余所見よそみをしていたのは悪かったわ。でもきちんと謝ったじゃない！なのに男のあなたが謝らないなんて納得出来ないわ！」

「君は……私を知らないのか？」

しかし、男の人はそれに答えず、驚いた顔をして私を見つめている。

「申し訳ありませんが、今回は一人で王都に來ましたので……そんなに有名な方でしたの？」

わざと嫌味っぽく言ってしまったがもう止まらない。男の人はボカーンとして、目を

見開いている。

「それで！ ここまで言っても何か言う事はありませんの？」

イライラとしながら腕を組み、不機嫌にトントンと指で叩いていると、男はハッと我に返った。

「すまない、あの態度は申し訳なかった。謝罪しよう」

手を胸に当て頭を下げてきたので、私は男の人の態度に満足してニコッと笑いかける。「早くそう言って下さればいいのに。ではぶつかってすみませんでした、失礼致します」

スッキリして頭を軽く下げながら、男の人のわきを通り過ぎようとすると……横から手が伸びてきてガシッと腕を掴まれた。

「きゃー！」

「あつ、すまない」

いきなり腕を掴まれて驚き、声をあげたら、彼はバツと掴んでいた腕を離した。

「改めて謝罪したい、名前を聞かせてもらってもいいかな？」

男の人が気まずそうに整った眉を下げて聞いてきたが、騒ぎに少し人が集まってきた。近くにいた女性達がため息をついて、男の人をうつとりと見つめている。

私は掴まれた腕をさすって怪訝けげんそうな顔をした。

「名前を聞くなら、まずはそこから名乗ってはどうですか？ それに謝罪なら先程いいただきました。これ以上は結構です！ では……」

キッチリとお断りをする、もう用はないと頭を下げた。くるっと向きを変えてまた立ち去ろうとすると、彼はまた声をかけてくる。

「わ、私はカイルといいます！ よろしければお名前を！」

私は構わずにドンドンと歩くが、男の人——カイルさんは後を追ってくる。人通りが増えて、間がどんどん離れていくのにまだ追いかけてきていた。

「私はローズです」

必死に追いかけてくる姿に罪悪感が湧き、小さい声で名前を告げる。そして、もう一度ベコッと頭を下げて人混みの中へと小走りに向かった。

「ローズ……」

ようやく立ち止まってくれたのか、遠くからカイルさんが私の名前を呟く声がうつすらと聞こえた。私はそのまま人混みを抜けて路地裏の方へと抜けていった。

「はあ、なんて人の多さなのかしら。うちの町の何倍もいそうね」

少し端に避けて立ち止まるとため息をついて息を整える。

「やめて下さい」

その時、遠くから女性の悲鳴のような声が微かに聞こえてきた。私は考えるより先に足が動いていて、声のした方へと走り出していた。

路地の奥に行くと一人の綺麗な少女が男達に腕を引かれているところだった。少女の嫌がる様子から無理やり連れていこうとしているのは明らかだった。

「ほら、こっちに来いよ！ パパのところまで案内してやるぜ！」

「そうだ、その前にすこしだけ遊んでくれればいいからよー」

男達は少女をどんと路地の奥へと引きずっていく。少女は抵抗しているが、力の差があるようでほぼ無抵抗だった。

「やだ、誰か助けて……」

少女は目に涙を溜めて、恐怖からか消え入るような声で助けを求めている。

「待ちなさい！」

私は考える間もなく男達の前に立ち塞がると、男達を睨みつける。

「その子を離さない、嫌がついているでしょ！」

「なんだあ？ お前も遊んでほしいのか？」

男の一人がニヤニヤと笑いながら私を上から下までじつくりと見つめた。

「まあまあだな、こいつも連れてくか？」

もう一人の男が手を伸ばそうとこちらに寄ってきた。

「汚い手で触らないで下さい」

伸ばしてきた男の腕を逆向きに掴むと、体を回してそのまま地面に投げつけた。油断していたのか、男はモロに地面に叩きつけられると泡を吹いて気を失った。その様子にもう一人の男の顔色が変わった。掴んでいた少女の腕を離すと、凄い勢いで怒鳴りつける。

「そこにいろよ！」

男の迫力に少女は腰を抜かしてしまったようで、へにゃへにゃと地面に座り込んでしまった。

男は少女の様子を見て鼻で笑うと、懷から小さいナイフを取り出した。

「ちよっと動けるからって調子に乗りすぎだな。嫁にいけない顔にしてやるよ。だが安心しな、ちゃんと俺達が面倒見てやるからな」

ニヤニヤと笑うと、私を目掛けて突進してきた。

「危ない……！」

少女は顔を手で覆って震える声で叫んだ。私は男がナイフを出した瞬間に、首に巻い

ていたスカートを解いて手に持ち替えていた。ナイフを突き出した男の手を一瞬でスカarfで絡めとる。くるつと男に背を向けて、腕をグイッと引つ張れば男の体がフワツと宙に浮いた。

「うわっ！」

男は私の背中の上で一回転すると、そのまま地面に叩き落ちた。男が地面で悶えてる隙に落ちたナイフを拾う。

「立てますか？」

急いで少女の元へと向かい手を差し伸べると、少女は涙を流して首を振る。どうも腰を抜かして立てないようだった。

「では、失礼しますよ」

少女の足を支えて軽く抱き上げると、急いでその場を走り去った。

私は後ろを振り返り、男達が追いかけてきていないのを確認すると、人通りがある場所のベンチに少女を下ろした。まだ震えている少女の隣に座って優しく声をかける。

「ちよっと人と呼んでくるから待っててね」

すると少女は、私の服を掴んできた。遠くに行かないで……と目で訴えてきており、私はそばを離れられなくなる。

「わかったわ」

苦笑すると少女の隣に再び座り直した。

「私はローズ、あなたの名前は？」

「キャ、キャシーです」

少女——キャシーはようやく声が出るようになったようで、その様子にホッとする。

「キャシーはなんであんなところにいたの？」

「私……ロンと買い物に来ていて、お店を見ているうちに夢中になってはぐれてしまつて……」

小さい声をさらに小さくしながら下を向いて話している。

「そっか。ならロンさんがきつと心配して捜しているわ。私も一緒に捜すからはぐれた店まで行つてみましょうか？」

「お願い出来ますか？」

少女は申し訳なさそうに顔を見上げる。よく見れば、フワフワと可愛いプロンドの髪に、小さな白い顔に大きな瞳。美少女と呼ぶに相応しい見た目に、男達に誘拐されそうになるのも頷けた。

「ええ勿論。さあ行きましょ！」

私は、バツ！と立ち上がり、キャシーに手を差し伸べた。笑いかけるとキャシーはようやく笑顔を見せて私の手をしっかりと掴んだ。私達はキャシーの記憶を頼りにロンさんとはぐれた店を捜す。

「お嬢様！」

すると遠くから男の人の心配する声が聞こえた。声のする方を見て見ると、執事らしき格好をした男の人がキャシー目掛けて駆け寄ってきた。

「お嬢様！ 捜しました、お怪我は？」

男の人はキャシーの体に怪我がないか確認をしている。そして腕に強く握られたような痕が残っているのを見つけた。

「こ、これは！ 大変だ……おおい！ ここだ、お嬢様が見つかったぞ！」

いきなり大声で叫ぶと、どこからともなく人が溢れてキャシーを取り囲んだ。

でも先程とは違い、キャシーの安堵している顔と本当に心配そうにしている男の人を見て、私は彼らに任せようとそっとキャシーから離れた。

「待って！」

キャシーは私を捜しているようだった。そっと人の隙間から顔を見せて、苦笑して手を振った。

キャシーが手を伸ばそうとするが、私はその手を掴まなかった。
じゃあね！　口を動かしてニツコリと笑ってその場を立ち去った。

「ローズ……様」

キャシーはロン達に連れられながら、ローズの事が頭から離れなくなっていた。



「全く王都ってのは落ち着かないところね。人も多いし厄介事も多いわ。やっぱり私には場違いみたい」

王都に着いて早々トラブルに巻き込まれてしまい、優しい父や弟のいる平和な領地が懐かしくなってしまうため息をついてしまった。意気消沈していると、お姉さんが笑顔で話しかけてくる。

「あなた、今日の宿は見つかった？　もしまだならうちの白馬亭はどうかしら。夕食と朝食がついて五千ベースピツタリよ！」

「五、五千ベース！」

高額な金額を聞いて、寂しさなんて吹き飛んでしまった。

「なんて高いの。うちの町で五千ベースも出せば一番高い宿に五日は泊まれるわ」

「どこの田舎のお嬢さんかな？　王都で五千ベースなら良心的よ」

声をかけてきたお姉さんが私の反応に苦笑している。

「け、結構です。もう少し安い宿を探してみますから」

声をかけてくれたのに申し訳ないと思いつつ断ると、そそくさとお姉さんのそばを離れていった。

「あー、待って！　まともな宿の中ではうちが一番安いのになあ……まあさつとまた来るわね」

お姉さんが何かを言っているが、振り切ってその場を走り去る。

……お姉さんと別れて数時間。私は王都中を駆け回り、結局先程声をかけられた白馬亭の前に戻ってきた。あんな風に断った手前、宿に入るかどうか迷う。

あれから色んな宿を回ってみたが、この白馬亭より安い宿は見つからなかった。これ以上安くなると男女混合の相部屋や風呂トイレ食事なしの劣悪な環境の宿しか見つからなかったのだ。

どうしようかと迷い、店の前をウロウロしていると、扉が開いて先程のお姉さんが顔を出した。

「あつ！ さつきの」

お姉さんは宿の前をうろつく人がいると様子を見に来て、私に気がつき笑いかけた。

「先程は……その、すみません」

あんな風にあの場を去ってしまい申し訳ないと謝って頭を下げた。

「ちょうど部屋が一室空いてるわよ、どうしますか？」

お姉さんは気にする様子もなく私を宿に招き入れ、ニツコリと笑って聞いてくれた。

「一室、お願いします」

私は恥ずかしくなりながら五千ベースを差し出した。

「勿論大歓迎よ！ じゃあ部屋に案内するわね、こっちょ」

お姉さんはお金を受け取ると、私を歓迎してくれた。そしてまずはと一階を案内してくれる。

「ここで食事が出来るのよ、このコインを出せば料理を頼めるわ」

広い部屋にテーブルがいくつも並んでいる。その奥にカウンターがあり、コインを二枚取り出して私に渡してくれた。

「夕食と朝食の分よ。ここのカウンターにいるおじさんに出してね！」

私はお金と同じ価値があるのだと大事にコインを握りしめた。

「じゃあ、次は部屋に案内するわね」

お姉さんは二階へと上がると、六室あるうちの一番端、「五」と書かれた部屋の扉を開いた。

「ここよ、中から鍵がかけられるから忘れずにかけてね。変な輩^{やから}は泊まってないけど、女の子だし万が一って事もあるからね。あなたみたいな可愛い子は気をつけないと」

「可愛い子？」

私はキョロキョロと周りを見るが、お姉さんが案内しているのは自分だけだ。

その様子にお姉さんがケラケラと笑い出す。

「あなたの事よ！」

「私ですか？ 可愛いなんて……言われた事ないから」

言われ慣れない褒め言葉に恥ずかしくなり、頬が熱くなる。

「あら、あなたの周りの人は見る目がないわね。あなたは着飾れば化けるタイプだわ」
「そうでしょうか？」

改めて自分の古びた服を確認して、やはりお姉さんの言葉はお世辞^{せじ}だと納得する。

「ま、そういう事。女の子なんだから気をつけてね。夕食はこの時間なら何時でも食べ

られるわ。朝食は六時過ぎなら大丈夫よ。トイレとお風呂は部屋の中にあるから」

お姉さんは早口で説明をすると、はいつと鍵を私に渡した。

「ご親切にありがとうございます」

ペコッと深くお辞儀を返して、顔をあげるとお姉さんの驚く顔が目の前にあった。

「私は仕事なんだからお礼なんていいのよ」

私の恐縮した様子に苦笑している。

「いえ、お姉さんの気持ちが嬉しかったんです。ですからやっぱり、ありがとうございます」

お姉さんは多分、私の為にこの部屋を取っておいてくれたのだ。あれだけ王都中の宿を回ればこの宿がどれだけ良心的かわかった。そんな宿がこの時間帯に都合よく空いてるわけがなかった。

私はもう一度お礼を言々と部屋へと入った。



「変な子……」

私は田舎育ちっぽい女の子を部屋へと案内すると、そのおかしな様子を思い出しながらも嬉しくなって階段をスキップするように下りていった。仕事とはいえ、感謝されると嬉しくなる。

「おっなんだ？ 機嫌がいいな」

カウンターにいたシェフのおじさんがご機嫌な私に声をかけてきた。

「別に……あつそうだ、五号室に泊まってる女の子があとでご飯を食べに来ると思うんですよ。可愛らしい子だから、少しサービスしてあげてくれない？」

お願いと手を前で合わせてウインクする。

「仕方ねえな、お前の賄いから少し引いとくぜ」

おじさんが笑ってそう言うが、賄いを減らされた事などなかった。

「ええ、それでも構わないわ！」

しかし本当にそれでも構わないと思えば機嫌よく笑うと給仕に戻る。

「珍しい事もあるもんだ」

おじさんは首を傾げ、彼女にそこまでさせた五号室の女の子が気になり出したのであった。

私は部屋に入ると鍵をかける。そしてベッドに少ない荷物を載せ、ボタンと仰向けに倒れ込んだ。

「つ、疲れた……」

王都に着いてからようやくともに休む事が出来たのだ。はしたないが、今は一人だしこのくらい許してほしい。

「少し……だけ」

私は少し休むつもりで瞳を閉じる。そして、疲れから深い眠りに落ちていった。

ようやく目覚めると、宿はシーンと静まっていた。外を見ると真っ暗で月が高く昇っている。

どのくらい寝たんだろう？ 空腹に腹の虫が鳴き出した。

「この様子だと、四、五時間は寝ちゃったのかも」

そっと部屋の外に出て、足音を立てないように階段を下りる。食事する場所の明かりは消えていて、カウンターだけが明かりに照らされていた。私はそっと近づいて小さく

声をかけてみる。

「すみません……」

しかし返事はかえってこない。やっぱり遅い時間のようだし、終わっちゃったかとガツクリと肩を落とす。

グウツ！ しかし、何も食べられないとわかると腹の虫が抗議するように大きく鳴いた。その大きな音に「誰だ？」と反応が返ってきて、カウンターの奥からシェフらしきおじさんが出てきた。

「すみません、寝過ぎしてしまって……もう夕食はないですよね？」

ダメ元でおずおずと聞いてみる。

「コインは持つてるのか？」

おじさんが仕方なさそうに聞いてきた。私は顔を輝かせ「はい！」と元気よくコインを見せる。

「しようにねえな、簡単なもんしか出せないけどいいか？」

「はい！ ありがとうございます！」

私は空腹で寝なくて済むと嬉しくなり、おじさんにお礼を言った。そして、カウンターに座ってキョロキョロと周りを見ながら料理を待つ。

「ほら、芋のスープとパンだ。あとは肉を焼くから待ってろよ」

おじさんがドンと湯気の立つ料理を私の前に置いた。

わざわざ温めてくれたのだろう。ぶつきらぼうに見えて、細やかな気遣いが嬉しかった。

「うわあ、あつたかそう！ いただきます！」

手を合わせると、早速スープを口に運ぶ。

「美味しい！ おじさん美味しいです。玉ねぎの甘さが染みるわ」

あまりの美味しさにほっぺを押さえながら落ちないように食べていく。

「大袈裟なお嬢ちゃんだな」

おじさんが苦笑しながら、時折こちらに顔を向けて肉を焼いている。

「このパンもスープにつけると最高ですね。味が染みて柔らかくなるから食べやすいです」

美味しかったのであつという間にスープとパンを平らげてしまった。

「しょうがねえやつだな、おかわりは食べるか？」

おじさんが嬉しそうに声をかけてくる。

「いただきます！」

私が好きぶと、おじさんも私と同じように嬉しそうな顔を見せた。

「ふう……もうお腹いっぱい。ご馳走様でした」

私は再び手を合わせる。おじさんはその様子を満足そうに見ている。

「お嬢ちゃんは美味そうに食うな、作りがいがあるよ」

「違うわ、美味しそうじゃなくて美味しいんです」

私は立ち上がり、真剣な顔で訂正すると、おじさんが驚いて手を止めてしまった。

「あつ、すみません」

興奮して立ち上がった事を恥じてスッと座り直す。

「本当に美味しかったです……そのご馳走様でした」

誤魔化すようにおじさんに笑いかけてお礼を言った。

「ハッハッハ！ そんなに喜んでくれるんならサービスしたかいがあったな！」

「サービス？」

「いや、ちょっとだけな。気にするな」

おじさんが残りの食器を片付けようと手を伸ばすと、私はその腕をガシッと掴んだ。
「おっ？」

おじさんが驚いて掴まれた腕を見つめる。

「こんな遅くに来て迷惑かけたのにサービスまで……おじさん、お手伝いさせて下さい」

啞然としているおじさんを余所^{よそこ}に、私は食器を掴むとカウンターの向こう側へと回り込んだ。

そして水場で食器を洗い始める。

「おい、おい何してるんだ？ お嬢ちゃんは客なんだ、そんな事しないでいいんだ」

おじさんが私を止めようとするが、構わずに皿を洗い続ける。

「いえ、私だけ特別扱いを受けたなんてしたら、おじさんにも迷惑がかかるかもしれません。もしバレたら、その代わりに皿を洗わせたって言えば大丈夫ですよ」

慣れたもので皿をあつという間に洗うと、ついでに洗い場をサッと拭いて綺麗にする。

「お嬢ちゃん、手際がいいな」

皿を確認するとおじさんが驚いた顔を向けた。

「毎日家事をしていれば、これくらい当たり前ですよ」

パッパツと手を拭くと邪魔にならないようにカウンターから出る。

「では本当にご馳走様でした。朝はきちんと時間通りに来ますね！ おやすみなさい」

おじさんに挨拶をすると、音を立てないように二階の部屋へ戻り眠りについた。

「おはようございます」

今朝私はちゃんと起きて、おじさんに笑顔で挨拶をする。

「おはようお嬢ちゃん、確かにびったりの時間だな」

おじさんは時計を見てニヤリと笑う。

「ふふ……では、これをお願いします。朝ご飯は何かしら。楽しみです」

本当に楽しみにしている様子の私を見ておじさんは笑っていたが、気にしない！

おじさんはまた少し多めによそってくれたみたいで、内緒とでもいうようにワインクした。

私は料理を受け取ると席に座り手を合わせる。すると「少しくらいいいだろうが！」とカウンターの方から男の叫び声が聞こえてきた。一体どうしたんだろうか。

「おい！ こっちは客なんだぞ！」

叫んでる男はおじさんに何か文句を言っているようだった。

「だから、皆同じものを配っているんだ！ 文句があるなら食わなくていい！」

しかしおじさんも負けず劣らず文句を返している。騒ぎを聞いて昨日のお姉さんが駆けつけてきた。

「どうしたの？」

お姉さんが二人を落ち着かせようと声をかける。

「いやこの客がなあ。飯の量が足りないから、スープを大きな器いっぱい注いでく
れって無茶な事を言うんだよ」

おじさんが呆れて男を睨みつけた。

「だって見てみるよ、俺はこんなに体が大きいんだ。こんなちよつとじゃ足りないんだ
よ！」

確かに男は大きく、持っている器がとても小さく感じられた。

「見ろよ、他の奴らにはちよつとよくても俺には少なすぎる！」

「料金は一緒なんだからしょうがないだろ」

「あー」

私は言い争う二人にそつと近づいていった。

「お嬢ちゃん、どうした？」

おじさんが気がついて声をかけてくれる。

「先程の話が聞こえてきて……それならご飯分このお兄さんに働いてもらうのはどうで
すか？」

「働く？」

「ええ、このガタイなら上の方にも手が届きそうですし、いつも掃除出来ない場所を掃
除してもらったりとか、重いものを運んでもらったりなんて……」

昨日自分がしたような事を提案してみた。

「まあ、働いてくれるなら飯をサービスしてやってもいいな」

おじさんもお姉さんもそれならと顔を見合せて頷いてくれた。

「構わないぞ、ここの美味しい飯が食えるならなんでも手伝おう！」

男も腕をまくってやる気を見せる。おじさんも美味しいと言われて悪い気はしないのか、
苦笑した。

「なら、おじさん、サービスしてあげてよ。食べたらず速手伝ってもらわよ！」

お姉さんが大きな男の体をポンと叩いた。

「任せてくれ！」

男は料理をあつという間に平らげると、お姉さんに連れられて外へと向かった。

「お嬢ちゃんありがとな、あんな大男に暴れられたら店が壊れるところだったよ」

おじさんがありがたいと手をあげて感謝を伝えてきた。

「いえ……私も昨日アレでしたから、気まずくって」

あははと頭をかいて笑って誤魔化した。

「ほらよ、これはサービスだ」

おじさんがこっそりとクッキーの袋を渡してくれた。

「わあ、美味しそう。ありがとうございます！　じゃあ私は何をお手伝いすればいいですか？」

「さっき揉め事を解決しただろ？　その分のサービスだよ」

おじさんはウインクすると、それ以上は受け取る気はないとカウンターへと戻っていった。おじさんの頼もしい背中に頭を下げ、ありがたくクッキーをいただく事にする。

「さてと、今日は王宮に行って、ちゃんと来た事を証明しないと……」

私は宿を出る準備をすると階段を下りる。そしてテーブルを拭いてるお姉さんに声をかけた。

「お世話になりました！」

そう言って鍵を渡した。

「はい、ご利用ありがとうございました。またいつでも利用してね」

お姉さんは少し寂しそうに鍵を受け取った。

「はい、その時はよろしくお願いします。それと、ちょっとお聞きしたいのですが……王宮に行くにはどうしたらいいですか？」

「あなた、王宮に用があるの？」

お姉さんが王宮と聞いて驚いている。

「はい、まあ大した用ではないので、言伝をしたらすぐに帰るんですけどね」
本当に断って帰るだけなんだからと笑って誤魔化する。

「それなら、この道をまっすぐに行けば王宮に続く橋があるわ。その橋のところに王宮に入る為の門があつて門番がいるはずよ。門番に用を言えば人を呼んでくれるなりしてくれると思うわ」

お姉さんが丁寧に教えてくれる。

「ありがとうございます。行ってみますね！　あともう一ついいですか？」

「何？」

お姉さんは嫌な顔一つせずに優しく聞き返してくれる。

「実は、家で待っている父と弟にお土産を買いたいんです。いいお店を知ったら教えて下さい」

「お土産？」

「はい、王都に行く為にお金を工面してくれました。そのお礼に何か買ってあげたくて……」

「まあいい子ね。ならこの先の『ロドムの店』がいいわ！ 品揃えもいいし値段もお手頃で、王都でしか買えない品が多いわよ。私の名前を出せば少しおまけしてくれるかもしれないわ」

「『ロドムの店』ですね！」

「ええ、私の名前はジェシカよ。ロドムに白馬亭のジェシカの紹介で来たって言うてみて」

お姉さんはそう言うてウインクする。

「ありがとうございます。行ってみますね！ 次はいつ王都に来れるかわかりませんが……もし来る事があつたら、必ずまたここに泊まりに来ます！」

私は笑ってジェシカさんの手を握りしめ、お礼を言う。

「シェフのおじさんにもよろしく言うて下さい」

ジェシカさんに手を振りながら、教えてもらった道をまっすぐに歩き出す。ジェシカさんは外に出て、私が見えなくなるまで心配そうに手を振ってくれていた。



「あー！ 行っちゃったか？」

ローズが見えなくなったところでシェフのおじさんが急いで店から出てきた。

「あら、珍しいわね。お客様の御見送りなんて」

ジェシカがからかうように笑う。

「いや、なんだか素直で、珍しくいい子だったからな」

「あなたにもよろしくって言うてたわよ。また王都に来る事があれば必ず寄るって、よかったわね」

「そ、そうか。まあ、客の言葉なんかあてには出来ないがな」

「あの子は約束を違えたりしなさそうだけどね」

おじさんもそうは言いながらも、満足そうに笑って厨房に戻っていった。



ジェシカさんが教えてくれた道を歩き続けると大きな城が間近に見えてきた。城の前

の橋を渡ると、目の前には大きな門がそびえ立っている。

「凄い門、どうやって開けるのかしら」

そんな事が気になりほうつと門を見上げてしまっていた。

「何か御用でしょうか？」

門番の一人が話しかけてくる。私はちよいどいいやと王宮から届いた手紙を門番に見せた。

「王宮からこれが届いたのですが……」

「君宛てに？」

門番が信じられないとでもいうように私を上から下まで眺める。……王都に来てからずっとこんな感じだ。その様子に少しムツとして「おほん！」と咳払いをすると門番が慌てて目線をあげる。

「私も自分の事はわかってるつもりです。うちの領地はお金がありませんので……今日は、このお話を辞退しようと思ひ参りました」

私の言い分に門番さんも納得したのか頷いてくれる。

「それがいいよ。もうほとんどのご令嬢が集まっていますが……あなたには……」
言葉を濁し同情の目を向けられる。

「ええ、ですからこの事を伝えておいてもらえますか？」

「えっ！ ええつと、まあ大丈夫かな。わかりました、ではこの書状お預かりしますね。念の為大臣に確認してまいりますので、少しお待ちいただけますか？」

「えっ……」

私が顔を顰めるのにも気がつかず、門番さんは王宮に向かっていってしまった。

「待っても答えは同じよね」

私は、時間の無駄だろうと肩をあげると、くるつと向きを変えて来た道に戻る事にした。

あんまり遅くなるとまた宿に泊まらないといけなくなる。白馬亭は素敵だったがお金が持ちそうにない。たまの贅沢ぐらいにまた行きたいと思っていた。

「あれは……」

そんな私を、王宮の一室から一人の男が見ていた事に、その時は気がつかなかった。



「はあ……」

俺は仕事中にため息をついていた。その様子に親友のロイが珍しいと驚いて振り返ると、俺の顔を見つめた。

「どうしたんだ、カイル。ため息なんてついて？」

「えっ？ ああ……ため息をついていたか。気がつかなかった」

心配をしてくれているが、どうも心が落ち着かずには泊ってしまおう。

「お前が元気がないとなると、また女性絡みか？」

ロイが俺の過去の事情から推測したのか、同情した様子で尋ねてくる。

「今度はどうしたんだ？ また部屋にまで押しかけられて襲われそうになったのか。それともまた媚薬びやくを飲まされたとか？ あと考えられるのは、抱えきれないほどの手紙が襲ってきたとか」

ロイが冗談交じりに聞いてくるが、今回はそういった事ではなかった。

「ああ、どれも覚えがあるよ。だけどそんな事じゃない」

「もっと酷い事が？」

ロイが俺の答えにゾッと背筋が寒くなったのか、腕をさすっている。

「やはり女性には怖いな、俺はまだ婚約者なんていらないうって言ってるのに、大臣達うるさい事……自分の相手は自分で見つけたものだ」

ロイも俺の憂鬱が移ったように外を眺めている。

「ああ、また誰か来たようだ。婚約者候補なのかな？ それにしちゃ普通の子に見えるな？」

ロイの言葉が何故か気になり、一緒になって窓の外を見る。

「あっ！ 彼女だ！」

昨日出会った女性が門番と話しているのが見えて、俺は部屋を飛び出し、急いで城門に向かった。

だが、俺が着いた時、城門にあの子はいなかった。

「どこに……」

俺がどうしようかと迷っていると、門番が書状を手に戻って、俺に声をかけてきた。

「カイル様、そんなに慌ててどうされました？ あれ？ ここに女の子がいませんでした？」

そう言って、キョロキョロと俺と同じように何かを捜す門番。彼も同じ人を捜しているようだった。

「お前は彼女と喋ったのか!？」

門番の肩を掴んで問いただした。

「は、はい。王子の婚約者候補の方のようでした」

「王子の？ では例の婚約者候補の令嬢の一人なのか」

彼女が王子の相手だとわかり顔が曇った。

「そのようです。しかし自分は分不相応だから、この話を辞退したいと断りに来たよう
です」

だが、その言葉に気分が上がり顔がニヤける。

「それで、念の為大臣に確認に行つたところ容姿をお伝えしたらそのまま追い返せ
と……でももういないなら、わざわざ追いつ返す必要ありませんね」

「おいお前、彼女の事を大臣になんて伝えたのだ」

門番と大臣の、彼女に対する対応に少しイラつき、顔を伏せて聞く。

「見たままを伝えましたよ。カイル様も見ましたか？ 彼女、服はまあ綺麗にしてあり
ましたがどう見てもお古だし、髪も自分で梳かしただけでしたよ。靴なんかずつと歩い
てきたんだか、ボロボロでした。その事を大臣に伝えたら、王子には相応しくないと一
喝してました」

門番は悪びれる様子もなく笑って伝えてきた。

「なんだと……」

俺はたまらずに低い声が漏れた。

「駄目だ……彼女が必要だ。今すぐ連れ戻してこい」

俺の言葉に門番が啞然として、固まっている。

「聞こえなかったのか？ 今すぐ彼女を連れ戻してこい！ 連れてこれなければお前の
明日はないと思え！」

ギロツとひと睨みすると門番は飛び上がって敬礼する。そして彼女を捜しに城下に
走っていった。

「俺にも王子にも興味がない女性……ローズ嬢」

俺は門番から受け取ったローズ嬢の書状を握りしめ、城下を見つめる。あの中にまだ
彼女がいるのかもしれないと思うとその場を動けなかった……しかしずっとその場に
いるわけもいかず、後ろ髪を引かれる思いで城へと戻る事にした。

俺はこのクロフォード王国のローウェル公爵家の次男として生まれた。曾祖父そうそふの代か
ら王の側近として仕えてきたローウェル公爵家。俺も歳が同じ第二王子ロイの側近にな
るべく、幼い頃から教育を受け彼と共に過ごしてきた。ロイとは親友と言えるような関
係を築き、楽しい日々を送っていた。

しかし、そんな順風満帆な日々は幼少期に崩れ落ちた。

俺はどうやら容姿がかなりいいらしい。別に自慢でもない、むしろその事を嫌だと思っている。それはこの容姿のせいで苦勞する事になったからだ。

王子のロイも文武両道、容姿端麗ようしたんれい。そんな男が二人でいると、夏の蚊のごとく女が湧いてくる。

初めて女性を恐ろしいと思ったのは六歳の時。俺はロイの兄の誕生日祭のパーティーに、ロイの付き添いとして参加させられていた。同じくらいの歳の貴族の子供も多数参加しており、何度も繰り返される挨拶にロイと俺も飽き飽きとしていた。

そんな時、ロイがつまらないこのパーティーを抜け出そうと持ちかけてきた。そんな魅力的な誘惑を幼い男の子が撥ね除けられるはずもなく……俺とロイはそつと会場を抜け出して庭園にある植木の迷路へと走り出していた。そんな俺達をじつとりと見つめる瞳に気づかずに。

俺とロイは迷路の中で鬼ごっこを始めた。鬼は俺。ロイが先に迷路に入り、俺がロイを見つめる、そんな遊びをしていると俺が隠れる番が回ってきた。

さっき見つけたあのくぼみに隠れよう。俺は目星をつけていた隠れ場所に向かうと、息を潜めてロイが来るのをクスクスと笑いを殺しながら待っていた。しかし、そこに来たのはロイではなかった。

「こんにちは、どうしたの？　こんなところで一人で迷子かな。私がいいところに連れていってあげるわ、とつてもいいところに……ね」

そこに来たのは、挨拶の時にじつとこっちを見つめていたどこかの令嬢の母親だった。もう名前も覚えていないし思い出したくもない。その女は嫌がる俺を引つ張ると、人目のつかない木の陰へと連れていき体をベタベタと触ってきた。俺を気持ちよさそうに触っている顔は化け物そのものだった。俺は恐怖から大声で叫ぶと今度は口を塞がれる。そのままいつの間にか用意されていた袋に詰められそうになっているところを、ロイが他の大人を呼んできてくれて難を逃れた。

その日から俺は、キツイ香水をつけた大人の女性が近づくと気持ちが悪くなり、吐いてしまうようになってしまった。近づいても平気な女性は自分の母とロイの母親。

子供の女の子は平気だったが、それも歳を重ねるごとに女性の片鱗へんりんが見え出し、嫌悪感が募った。女は俺を見ると黄色い声をあげる獣だった。

もう襲われる事のないよう鍛練した事で自信を持ち、女性を見ても吐く事はなくなった。

だが、今でもジツトリと見つめられるといい気はしない。特に自分に気がある女性特有の、あの視線がたまらなく苦手だった。自分でもこのままではいけないと、どうにか